

小学生における和語と外来語の区別の実態と考察

外来語教育は放置されている

八木良子 下鳥照子

研究経過

まず、子どもが外来語として意識していることばを知るために、子どもの作文に注目し、子どもが書くという言語作用の中で、どれくらい外来語を使っているか、またその外来語はどういうものかを調べてみることにした。東京都町田市立南大谷小学校の学校文集（昭和四十九年度全学年全員学校行事としてまとめられたもの）より、外来語をひろい出した。その結果、子どもの生活の中には予想以上の外来語があるということに驚いた。一年生・五十二語、二年生・百八十四語、三年生・百七十七語、四年生・二百一語、五年生・百六十三語、六年生・百三語である。また、子どもが書きつけた外来語のほとんどは名詞で、形容詞、動詞はごくわずかだった。学年の特徴を上げると、一年生の場合は、外来語をひらがなで表記しているものが多いが、二年生になると、数が三倍以上になるだけでなく、かたかなで書けるようになること、四年生に至っては、全学年通じてその数が一番多くなり、特に固有名詞の増え方が著しい。五年生から、固有名詞は少くなり、わずかなではあるが動詞が増える。ところが、六年生では、外来語の総数が五年生より少くなっている。全学年を通すと、数の変動はあっても、内容における特徴はあまりない。このように子どもたちは、数多くのことばの

中で、外来語を区別しているわけだが、その区別をどこでしているのか、またいつその力が身につくのか、関心を抱かせられるところである。

数多くの外国語のうち、日本人の日常生活に定着していく外来語は、日本人にとって受け入れやすいものといっている。だから、日本語に定着した外来語には、何らかの特徴があるのではないか。という仮説を立てて、外来語の分類整理を試みた。

国立国語研究所の分類語彙表と町田市立南大谷小学校の学校文集所収のものをすべて、抜き出し、長音、拗音、促音、撥音及び語尾に注目して、整理した。千六百二十八語を、語尾で分類すると、意外に大きな偏りが見られた。（表Ⅰ）そして、外来語独特の音の連結のパターンをひろい出すと表Ⅱのようである。そこで、改めて調査を、三音と四音及び語尾に特徴があるものに限って、テストした結果と考察が以下である。

表Ⅰ

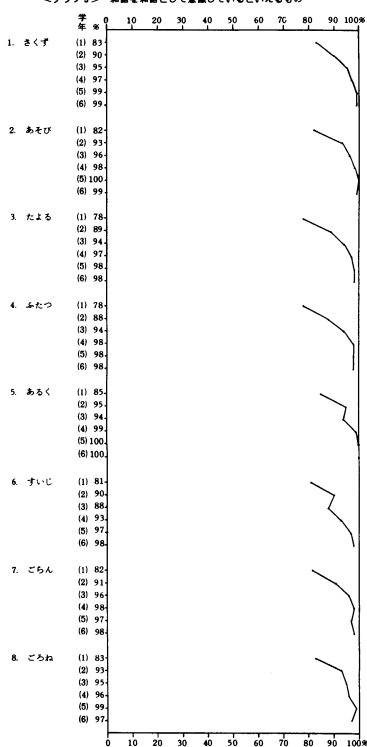
語尾	語数		語尾	語数		語尾	語数		語尾	語数	
	語彙表	文集		語彙表	文集		語彙表	文集		語彙表	文集
ー ント ト ル ス ク ム ブ ド ア チ グ ツ	158	71	イ	19	4	ケ	4	0	バ	2	0
	152	51	イラ	16	5	ダ	4	3	モ	2	1
	140	58	ブ	14	6	シュ	4	0	ファ	2	0
	112	51	マ	14	2	レ	3	0	ネ	2	2
	112	39	ジ	13	5	バ	3	0	ズ		4
	58	26	キ	11	6	ビ	3	1	デ		1
	54	19	フ	8	4	ノ	3	2	1語ずつのもの		
	42	24	ロ	7	4	ボ	3	3	ガ・ゴ・バ・ゲ		
	38	21	リ	5	1	ヤ	3	3	ジュ・サ・ザ・		
	30	6	カ	5	3	ナ	3	3	シャ・ボ・ミ・		
	27	9	タ	4	0	シ	2	0	エ・シエ・チャ		
	26	8	オ	4	1	ハ	2	0	ボ		
20	10	コ	4	3	ゼ	2	1	計	1,153	475	

表Ⅱ

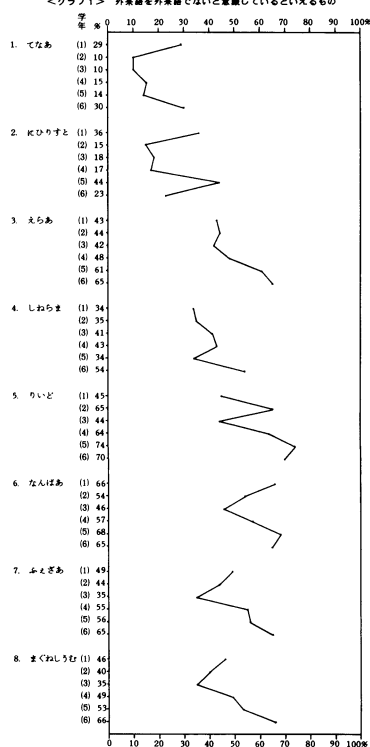
3文字のパターン
□□□, □ン□, □ッ□, □-□, □□-, □□ン
4文字のパターン
□□□□, □□ッ□, □□-□, □ッ□□, □-□□, □ン□□, □□□ン
□ン□ン, □-□ン, □□-ン, □□ン□, □□□-, □ン□-
5文字のパターン
□□□□□, □□□ッ□, □ッ□□□, □□ッ□□, □□□-□, □-□□□
□-□ン□, □-□-□, □□□ン□, □ン□ン□, □□ン□□, □ン□□□
□□□□ン, □ッ□-□, □□□□-, □□-□-

70	65	61	57	52	47	42	37
㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩
ぼびやあ	めろでい	すぶりんぐ	めっせんじやあ	かんぐる	あらすか	くつろぐ	ふくらむ
なんぼあ	れもんてい	らんぽんぐ	まねえじやあ	えんぜる	おさか	かたぐ	すくらむ
	66	62	58	53	48	43	38
	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩
	ふあん	にひりすと	まぐねしうむ	しんくろ	ますらお	あまから	かくてる
	ふかく	こんですと	あるみけうむ	おんぼろ	しなりお	はいから	かくれる
67		63	59	54	49	44	39
㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩
うえあ	おじや	みっしょん	なみだぐむ	どんぶり	こむぎこ	しねらま	ついやす
		はくしよん	めかにずむ	いんてり	ふらすこ	くろこま	めりやす
68		64	60	55	50	45	40
㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩
ふえざあ	ういるす	ふるいど	のうたりん	ふらんこ	うえすと	いわぶろ	ころいど
		ふいいるど		どろんこ	やまざと	ますぶろ	よろいど
69				56	51	46	41
㊦ ㊩	㊦ ㊩			㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩	㊦ ㊩
きやばれい	こもちがれい			いたりあ	したしい	かしかり	ねくたい
				くれよん	たくしい	あるかり	たべたい

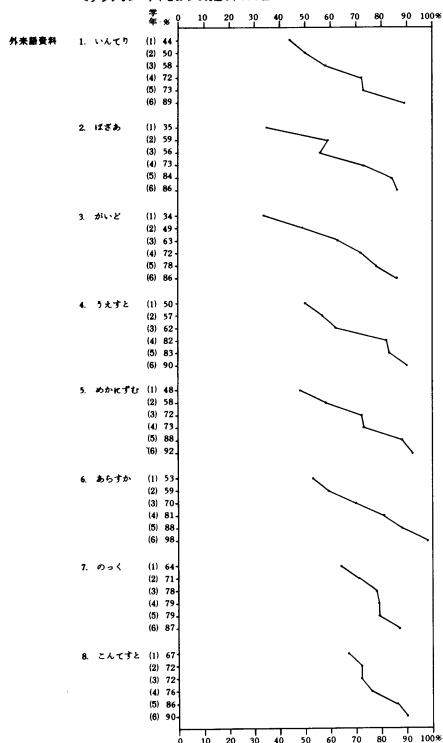
<グラフ3> 和語を和語として意識しているといえるもの



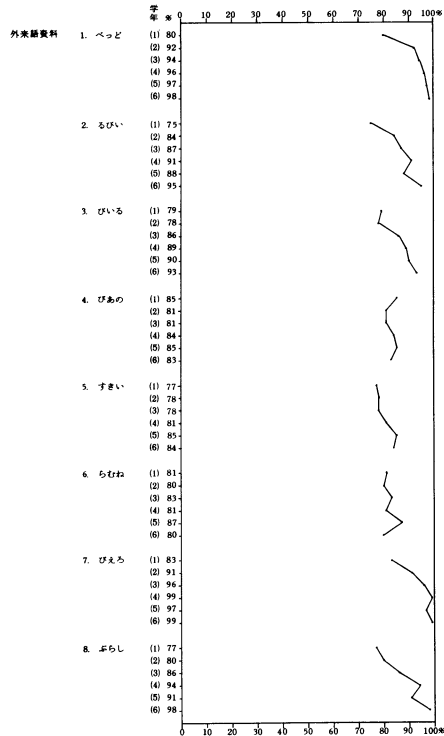
<グラフ1> 外来語を外来語でないと意識しているといえるもの



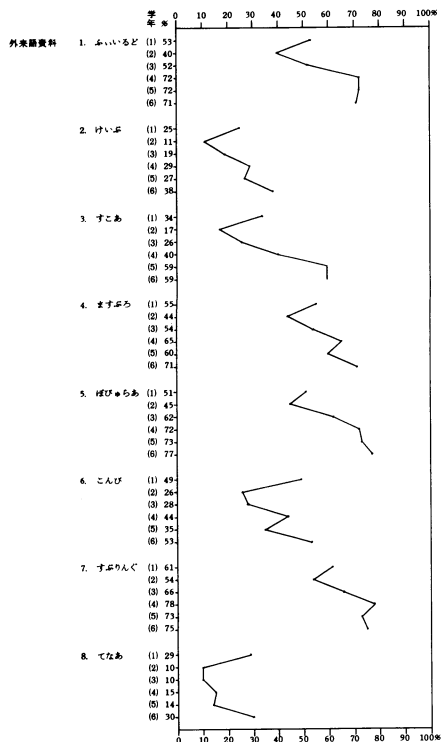
<グラフ3> 学年をおって発達し、六年生で100%に近い正解率を示すもの



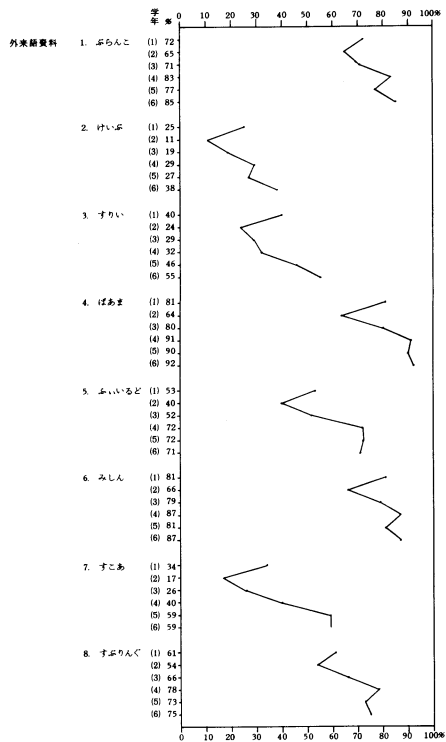
<グラフ4> 外來語を外來語として意識しているといえるもの



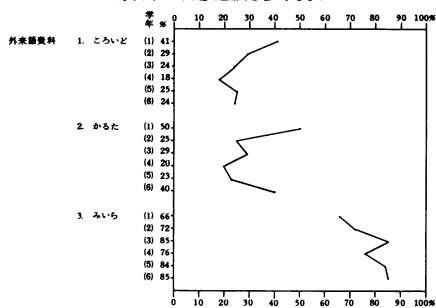
<グラフ5> 2年生、5年生で正解率が低下するもの



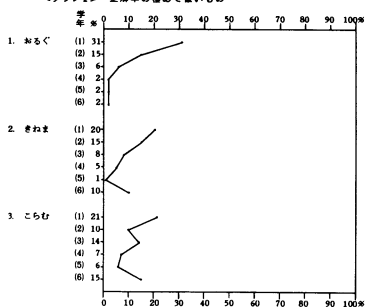
<グラフ6> 2年生で正解率が低下するもの



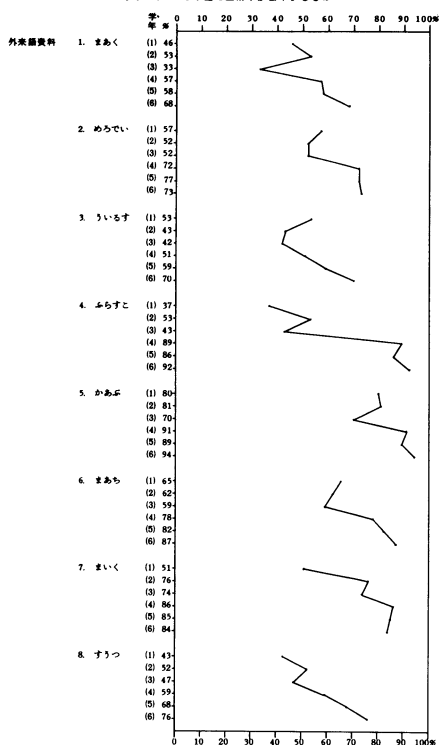
<グラフ1> 4年生で正解率が低下するもの



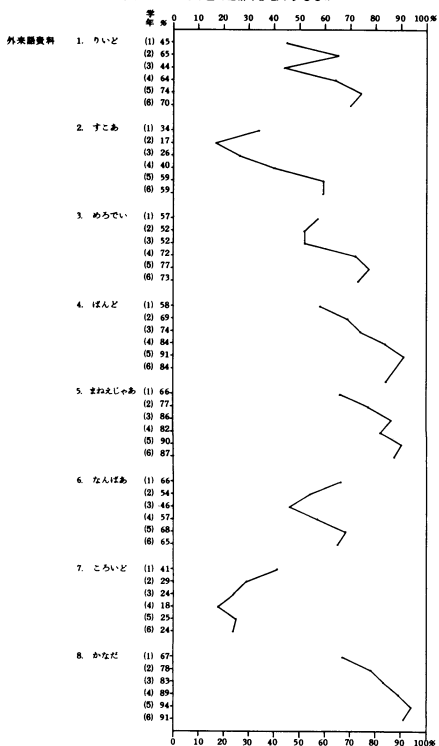
<グラフ2> 正解率の極めて低いもの



<グラフ3> 3年生で正解率が低下するもの



<グラフ10> 6年生で正解率が低下するもの



結果と考察

△正解率と語のパターンとの関係△

○外来語を外来語ではないと意識しているといえるもの

「ふえざあ」「こんび」「ふりい」「て

なあ」「みっしょん」「しねらま」「たお

る」「はいから」「ころいど」「ますぶろ」

「しなりお」「しんくろ」「めりやす」

「ふいいるど」「かるた」「たいぶ」「す

ろう」「でっき」「けいぶ」「すこあ」

「なふたりん」「りんち」「えらあ」「び

んと」「しいと」「びち」「りいど」

「まあく」「まぐねしうむ」「めっせんじ

やあ」「にひりすと」「なんばあ」以上の

三十二語は、学年間の変動はあるが、正解

率が全学年を通して六〇%以下のものである。(グラフ1参照)それらの語の特徴をあげると、「ふえざあ」「てなあ」「すろ

う」「けいぶ」「えらあ」「しいと」「り

いど」「まあく」などのように、長音の入

っている語が多い。

また、「めっせんじゃあ」「まぐねしう

む」「にひりすと」などのように、語尾に

外来語の特徴がある語も見られた。テスト

作成中の私たちの予想は、このような外来

語の特徴がはっきり表われた語は、正解率

が高いものと予想していたが、それに反し

た結果であった。

○正解率の極めて低いもの(全学年三〇%

以下のもの)

「おるぐ」「きねま」「こらむ」の三語

は正解率が全学年を通して三〇％に及ばなかった。(グラフ2参照) このグラフの特徴は低学年の方がわずかではあるが高い傾向にあることである。

○和語を和語として意識しているといえるもの

「あるく」「ひらや」「あそぶ」「やまだ」「すいじ」「ごらん」「よかぜ」「きえろ」「くらし」「はい」「ためす」「ごろね」「たよる」「さくず」「あそぶ」「こもちがれい」「ふたつ」の十七語は、全学年を通して正解率が高かったものである。(グラフ3参照) これらは、一年生においても八〇％の正解率を示し、四・五・六年になると一〇〇％に近い正解率を示している。これらの語のほとんどが三音で構成された語であった。

○外来語を外来語として意識しているといえるもの

「らっぱ」「べっど」「こっふ」「るびい」「びいる」「びあの」「すきい」「らむね」「びえろ」「ぶらし」の十語は全学年を通して正解率がよかったものである。これらの語はすべて三音で構成されている語である。(グラフ4参照)

ここで、和語を和語として意識しているといえるものと、外来語を外来語として意識しているといえるものとを比較して考えてみると、どちらもほとんどが三音で構成された語である。このことから、三音で構

成された語においては、和語と外来語との区別が、かなりはっきりしているものと思われる。(グラフ3・グラフ4参照)

△正解率と学年的発達
○学年をおって発達し、六年生で一〇〇％に近い正解率を示すもの

「いんてり」「ばざあ」「ぶりき」「がいど」「かたろぐ」「うえすと」「れもんてい」「めかにすむ」「あらすか」「のっく」「こんてすと」の十一語が学年をおって発達し、六年生で一〇〇％に近い正解率を示すものである。(グラフ5参照) このことから、和語と外来語との区別において、学年発達が認められることばもあるということがわかる。

○二年生で正解率が低下するもの

「すりい」「すぶりんぐ」「べいじ」「みしん」「ばあま」「たいぶ」「ふおく」「ぶらんこ」「ころな」「りんち」「ぼびゅらあ」「ますぶろ」「はいから」「すこあ」「けいぶ」「すろう」「ふいいるど」の十七語は、二年生で正解率が低下する語である。(グラフ6参照)

○二・五年生で正解率が低下するもの

「ふいいるど」「けいぶ」「すこあ」「はいから」「ますぶろ」「ぼびゅらあ」「こんび」「ぶらんこ」「りんち」「みしん」「すぶりんぐ」「があげ」「てなあ」の十三語は、二・五年生で正解率が低下する語である。(グラフ7参照)

○三年生で正解率が低下するもの

「めりやす」「まあち」「びっち」「なんばあ」「かくてる」「かあぶ」「あるかり」「てなあ」「ばざあ」「まあち」「ぶらすこ」「まぐねしうむ」「あるみにうむ」「ごるふ」「かばあ」「ふえざあ」「ういるす」「こんてすと」「まいく」「すうつ」「すくらむ」「びんと」「しいと」「まあく」「めろでい」「みっしょん」「りれい」「たおる」の二十八語は三年生で正解率が低下する語である。(グラフ8参照)

○四年生で正解率が低下するもの

「ごろいど」「かるた」「みいら」の三語は四年生で正解率が低下する語である。(グラフ9参照)

○六年生で正解率が低下するもの

「たおる」「めろでい」「にひりすと」「ごるふ」「ふいいるど」「すこあ」「まねえじゃあ」「あるみにうむ」「なんばあ」「ふおく」「らんじんぐ」「りいど」「ばんど」「たくしい」「かなだ」「ごろいど」「たいや」「ねくたい」の十八語は六年生で正解率が低下する語である。(グラフ10参照) ただし六年生の場合、正解率が低下するというよりも、五年生から停滞したままの状態にある。

小学校学習指導要領(昭和四十三年七月)によると、かたかなの学習については「一年、〇書くこと、(2)イ、かたかなのだいたいを書くこと、二年、〇書くこと、(2)ア、

かたかなを書くとともに、文や文章の中でかたかなの適切な使い方がわかること、三年、〇書くこと、(2)ア、かたかなを文のなかで適切に使う。」と記されている。

現在の小学校国語教育で、子どもが外来語と和語との区別を意識する場合は、わずかに、表記上での、かたかなとひらがなの区別をつけるというところではない。

指導要領にあるように、小学校では、二年生から、「かたかなの適切な使い方」の一つとして、外来語と和語との区別を指導するわけだが、今回の調査結果を見ると、その指導がなされているはずの二年生の正解率は低い。また、二年生で「かたかなの適切な使い方」は習得されているはずなのに、二年生で正解率が低いばかりか、三年生でも、なお低くなっているというのは、どういふことなのだろうか。これは、和語と外来語の区別を単に、表記上の問題としてしか扱わないところに原因があるのではないだろうか。表記上で区別できるには、表記以前の段階で何らかの区別が必要であるにもかかわらず、その区別をつけるための指導がなされていないのが現状といつてよさそうである。

また、五・六年生における正解率が落ち込んだり、停滞したりするのは、外来語と和語とを区別する感覚を整理されずにきた五・六年生が、今度は意味によって処理しようとするためではないだろうか。